

～かなみっ子のすこやかな成長、質の高い乳幼児教育と保育を目指して～



つながる



函南町幼児教育センターだより17号

令和8年1月発行

連絡先 学校教育課内

幼児教育センター 979-8121

東海大学を訪問してきました

早いもので令和7年度も残り2か月となりました。各園・学校は、令和8年度に向けての教育計画を考え始める時期となり、多忙な日々を送っていることと思います。

令和6年度接続研究推進会議で「義務教育修了時のめざす子供の姿」、令和7年度には「架け橋期終了時のめざす子どもの姿」を決定し、架け橋期のカリキュラムの作成にも取りかかり始め、架け橋プログラムの取組も本格的に動き出しました。「函南町の架け橋プログラム」の取組には、アドバイザーの東海大学准教授の寶來生志子先生の指導・支援があります。今年度のお礼と次年度の指導・助言の依頼に東海大学を訪ねました。

寶來先生からは、次年度の研修について2つの提案をいただきました。

1つ目は、「往還型研修」の勧めです。「往還型研修」とは、各自がテーマを決めて実践し、その実践の成果や課題を持ち寄って再び研修で深掘り・共有・改善する「学び」と「実践」と「振り返り」を往復させるサイクルを繰り返す研修形態です。

令和7年8月の第3回接続研究推進会議で「子どもの生き生きと活動している写真」を持ち寄り、子ども主体の活動について話し合いをしました。この研修は往還型研修に類似しており、参加された方は、この時の研修をイメージしていただくとわかりやすいかと思います。研修に参加された方からは、「接続について自分事として捉えることができ、充実した研修ができた。」という感想が多くありました。また、園と学校の先生が語り合う貴重な場になり、園と学校の相互理解にもつながりました。「往還型研修」は、来年度取り入れていく予定です。

令和8年5月の第1回接続研究推進会議において、寶來先生から往還型研修について説明をしていただきます。その後、各自テーマを決めて実践し、8月の幼児教育センター夏季研修会で中間発表を行います。12月の第2回接続研究推進会議では、参加者全員が実践発表（ポスターセッション）をし、寶來先生から価値づけ・指導・助言をいただく予定です。

2つ目の提案は、新1年生の登校から朝の会が始まるまでの時間に、「遊びタイム」を取り入れることです。

「遊びタイム」では、「自分の好きな遊びを通して自分らしさを発揮することができる」「遊びを通して友だちづくりができる」「新しい環境に慣れる」という利点があり、その結果として「登校しぶりの減少に期待できる」ということです。また、教師は登校後の子どもの様子を見守りながら、「支度が遅い子がいてもせかさない、叱らない」「時間がかかっても自分でやるのを見届ける」「子どもの困り感には『どうしたらいいかな?』と寄り添いながら、子どもが自分で解決できるのを見届ける」等の関わりが大切です。子どもから手伝ってほしいと言ってきたときは手を差し伸べるが、それ以外は子どもの様子を見届けるようにすることが大切になります。「遊びタイム」の時間は学校の計画もあると思いますが、園から学校へのスムーズな移行ができるという利点があるので、ぜひ取り入れてみてください。



レゴで作った動物
幼児学科の学生の作品



寶來先生との話し合い

チーム担任制、桑村小学校の取組

チーム担任制を導入する学校が増えてきました。函南町では今年度桑村小学校で、チーム担任制を取り入れ始めました。チーム担任制は、複数のクラスがある学年や小規模校で取り入れられています。

桑村小学校では、1～3年と4～6年の2つの学年団に分け、担任を固定せず1週間交代（担任の先生からの提案で1週間交代になったそうです）で担任が替わっていきます。

田方では初めての導入であり、大変関心があったので、導入して9か月経ったところで関口校長先生に成果と課題について話を聞いてきました。

関口校長先生は、桑村小は小規模校でクラス替えがないので初めは縦割り活動を充実させ、子どもたちの交流を図ることを考えました。子どもたちにとっては、次はどの子と一緒にになれるのかという楽しみはありましたが、縦割り活動となるとどうしてもリーダーシップをとる6年生の担任の負担が大きくなってしまいます。そこで、もっと多くの先生が関われる方法はないかと考えたときに、チーム担任制を思いついたそうです。

「導入して9か月、子どもたちを見ていると大変落ち着いた生活を送れているが、本当の成果が見られるのは2～3年後ではないか。小学校は園でやってきたことをステップアップできているか、園は園でやってきたことが小学校でどう活かされているかをお互いにもっと見合い、学んでいくことが大切である。」と話していました。園との関わりを大切にしていきたいと考えていました。



<目的>

- 担任を固定せず、複数の目で子どもを見ることで子どものよさや困り感を把握することができ、「誰一人取り残さない教育」を目指す。
- 架け橋期の取組を1年生の担任だけに任せるのではなく、多くの先生が関わることで架け橋期の取組を自分事として捉える先生を増やすことができる。
- 今までは1年で担任が交代していたが、継続的に子どもに関わることができるようになり、引継ぎもスムーズにできる。

<成果と課題>

- 1年生も落ち着いた生活を送れている。また、3年生がリーダーとして力を発揮する場面も見られるようになった。
- 教科によって担当の先生が変わる教科担任制を合わせて導入することができ、より専門的な教科指導を受けることができ、充実した学習ができている。また、教員にとっては複数の学年を担当することで、教科の系統性を知ることができ教科指導に役立っている。
- 特別支援児に対し一人ではなく複数で対応することができ、担任の負担が軽減された。多様性を考えると、複数で対応できることはよかった。また、複数の目で見ると子どもの情報も多く得られ、得られた情報を保護者に伝えることで、保護者とのつながりを築くことができ、担任の負担も軽減された。
- 自立を目指し取り組んでいる部分を、「説明が足りない」、「丁寧さに欠ける」と捉えられており、保護者の理解が十分得られていない。保護者への周知を図ることが必要である。
- 担任が交代するときに前の週では何をやったかなどを引き継ぐために、教員間での情報共有の時間が増え負担となっている。
- 園の保育を小学校にどう生かすか、そのためには園の様子を見る機会を設けるなど園に学ぶことが必要である。



桑村小学校 学校だより
R 7.3 年度末号

